

「伝え合う力を高める授業」実現のための基礎作業 ：先行文献における〈実践のポイント〉の分類

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 折川, 司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9617

「伝え合う力を高める授業」実現のための基礎作業

— 先行文献における〈実践のポイント〉の分類 —

折 川 司

A Fundamental Study of Improvement of Ability to Understand Deeply Each Other through Language Communication — Classification of Point of Practices —

Tsukasa ORIKAWA

1 研究の目的と方法

(1) 問題の所在と研究の目的

平成 10 年に告示された学習指導要領には、国語科学習指導における核となる概念として、新たに「伝え合う力」という用語が示された。

物質的な豊かさが生活の中に浸透し、音声や文字による双方向的な関わりを他者との間に別段展開しなくとも生きていくことが可能となった現代においては、対人的な社会経験の不足している状態にある子どもが生まれ始めている（樋口,2006）。そのような状況においては、他者との関わり、それも特に相手の息づかいを感じながらの直接的な関わりの中で、思考や情報をやりとりし、新たな思考や価値を生み出していくための力—伝え合う力—を子どもたちに身につけさせていくことは非常に重要なことである。そのため平成 10 年の告示以降、この「伝え合う力」を高めるための学習指導のあり方が、国語教育喫緊の課題として多くの研究者及び実践者によって精力的に模索されてきた。

しかしながら、「伝え合う力」という用語が登場しておよそ 10 年を経て、伝え合う力を高める授業を実現するための実践のポイントへの認識と、その履行が国語教育の現場において若干曖昧になってきた感は否めない。言語力の向上が多方面から強く要請されている現在、伝え合う力の育成を目指す実践上のポイントを今一度確

認し、整理し直すことができれば、その成果は実際に学習指導にあたる実践者にも寄与できるものとなるに違いない。

(2) 研究の方法

本稿においては、国語科教育実践者に向けて示された複数の論文の中から、伝え合う力を高める授業に求められる要素要件（実践上のポイント）を抽出調査し、分類整理を試みる。

そして、伝え合う力を高める実践の場においては、どのような点を押さえていく必要があるのかということをはっきりと明らかにしていく。

2 分類整理の対象

次頁以降に示した表（表 1 から表 3）は、管見した限りにおける「伝え合う力を高めるための国語科学習指導」に関する各研究者の言説（のべ 112）を整理したものである。^{1) 2)}

この整理作業を行うにあたって対象とした資料は、次のような範囲において限定されている。

対象資料

- ・『国語教育研究』日本国語教育学会編
- ・『教育科学国語教育』明治図書
- ・『実践国語研究』明治図書

本稿においては、伝え合う力を高める授業を成り立たせるための実践上のポイントを明らかにすることに焦点を定めているため、主に国語

科教育の実践者を読者とする上記 3 誌を資料として取り上げる。

対象論文

分類整理においては、上記 3 誌に掲載されている研究論文の中から「国語科学学習指導における伝え合う力の育成（校種、文字・音声の別を問わない）」に関する研究者³⁾の言説を対象とする。今回は、本文中もしくは論文タイトルに「伝え合う力」「伝え合い」といった明確な記述があるものに限って分類整理の対象として扱い、「コミュニケーション」「対話」等の類似した表現で表されたものは取り上げない。⁴⁾

対象期間

対象期間は、教育課程審議会の答申が示された平成 10 年 7 月 29 日から 3 カ年（1998 年 7 月 29 日－2001 年 7 月 28 日）とした。

3 浮かび上がった 16 の実践のポイント

伝え合いに関するのべ 112 の言説を分類整理したところ、表 1 から 3 の左端の欄に示したように、伝え合う力を高める授業が成立するための実践上のポイントが計 16 項目浮かび上がってきた。

これら a から p のポイントについて、さらに共通項を探し、類型化を試みたところ、以下の三つのカテゴリーに整理することができる。

〈伝え合いの【前提】に関わるポイント群〉

〈伝え合いの【実際】に関わるポイント群〉

〈伝え合いの【成果】に関わるポイント群〉

これらのカテゴリーと 16 項目のポイントの

関連を簡略化して示すと次のようになる。

〈伝え合いの【前提】に関わるポイント群〉

- a 伝え合う内容が明確であること
- b 伝え合う相手が明確であること
- c 互いの異質性が尊重されていること
- d 伝え合う場（状況・条件）が用意されていること
- e 伝え合う目的を理解していること
- f 伝え合う手段・方法をもっていること
- g 伝え合いが綿密な指導計画に基づいていること
- h 表現と理解に関する基礎的な力が身につけていること

〈伝え合いの【実際】に関わるポイント群〉

- i 知識や考えを交流させ、相互に影響し合うこと
- j 言語活動が双方向性をもっていること
- k 多様な言語活動が関連づけられていること
- l 日常的に活動が行われていること
- m たえず自己の営みを振り返っていること

〈伝え合いの【成果】に関わるポイント〉

- n 認識が抜け深められたり、新たな思考や価値が生み出されたりすること
- o より良い人間関係が築かれること
- p 日常生活に生きる言語運用の力が育成されること

伝え合いの【前提】にかかわるポイント [表 1]

ポイント a / 伝え合う内容が明確であること	伝え合う内容を獲得している	桑原 隆	コミュニケーションにしても、伝え合う方にも、その大切な中身は、相手・場・メッセージ（内容）である。さらに加えるとすれば、情報化社会において急速に進展してきている媒体である。伝え合う力という文言は新しいものではない。問題自体はとくに新しい課題というわけではない。 「司会者の立場からの提言」『国語教育研究331』日本国語教育学会編、p48, 1999. 11
		小森 茂	一方、まだまだ教科書に依存する状況もあり、言葉で伝え合う力を育成するためには、誰が誰に伝えるのか、なんのために伝えるのか、何を伝えるのか、どのように伝えるのかという観点が必要で、正しいことではない。 「座談会 新しい国語科の実践課題と言語の教育としての役割」『実践国語研究207』明治図書、p91, 2000. 5
		相澤 秀夫	「伝え合う」前提、その内容としての個々の経験や考えが確立していることが必要である。それは、経験をもとに自分で考えることができる資質・能力であり、自分の考えをもてることである。 「総合的な言語運用能力としての『伝え合う力』の育成を」『教育科学国語教育576』明治図書、p14, 1999. 6
		安居 総子	(1) 学習者が、伝えようとする事柄（知識、情報、思想、意志など）を持っている、あるいはそれをつくれる状況にある。 「『伝え合う』をとらえ直し、『学び』を組織する」『教育科学国語教育576』明治図書、p17, 1999. 6
		山元 悦子	このような場を豊富に用意して、伝えたい内容を持たせ、それを伝え合う必然性のある場の中で、児童生徒同士が積極的に話し、聞き、聞いたことをまとめてまた伝えるといったやりとりとしての言語活動を意図的に、かつ日常的な状況として設けておくことがまず必要であろう。 「系統的な対話指導を目指して」『教育科学国語教育594』明治図書、p18, 2000. 8

ポイントa / 伝え合う内容が明確であること	伝え合う内容を獲得している	大西道雄	書き言葉で伝え合うという目的言語活動は、以下のように分節できる。1 目的(問題)意識を明確化する過程、2 メッセージを創出、組織し、構成する過程、3 応答を予測しながらメッセージを書き言葉で表現する過程、4 目的に応じてメッセージを受け手に送る活用過程、である。 『主体的伝え合い活動の授業組織化』『教育科学国語教育576』明治図書、p41, 1999. 6
		堀江祐爾	「伝え合う内容」と「伝え合う形式」、そして「伝え合う相手」が明確になった時、人はより豊かに表現し始めるのである。 『「伝え合う力」を高めるためのメディア・リテラシーの学習指導』『国語教育研究341』日本国語教育学会編、p37, 2000. 9
		河野庸介	「伝え合う力」とは、「表現力」と「理解力」の双方の言語能力を基盤とし、人と人との関係において互いの立場や考えを尊重し合いながら、言葉によって互いの考えや意見などを伝え合う力のことである。この「伝え合う力」は、人と人との間の相互理解を深め、よりよい人間関係を築き、協力して新たな価値を創造していくことを可能にする能力でもある。 『「生きる力」と国語科(二)』『教育科学国語教育586』明治図書、p129, 2000. 2
		世羅博昭	実践にあたっては、「伝え合う」前提としての、伝えるための内容をどのように豊かにするかに十分に意を注ぎたい。伝える内容が豊かにならないければ、「伝え合う力」を高めることはできない。事前に、学習者に表現したい内容を豊かに持たせる指導を展開した上で、学習者の考えを発表させるように仕向けた。 『学習者が目的的な活動を展開する過程で、確かで豊かな言語能力を育てる授業の創造を』『国語教育研究324』日本国語教育学会編、p36, 1999. 4
		安居総子	送り手と受け手との間のやりとりは、往復して考えるに価する事柄でなければならない。 『「伝え合う」をとらえ直し、『学び』を組織する』『教育科学国語教育576』明治図書、p18, 1999. 6
		金子守	「伝え合う」学習は、とすると、形式的・技術的レベルに流されがちだが、一方で、コミュニケーションの内容を高め合うような指導の在り方を考えていくことも大切である。目的意識の明確化とともに、コミュニケーションの相手や場をどう設定するか、それを踏まえて、内容の深化・充実化をどのように図っていくかが、「伝え合う力」を高める学習の重要な鍵となるだろう。 『「伝え合う力」を高める作文学習』『教育科学国語教育595』明治図書、p21, 2000. 9
		府川源一郎	「伝え合い」の能力は、伝え合うべきことがらも、伝え合うべき場面でも、有効に交流してこそ、身に付く。その意味で、今回の学習指導要領では、「相手意識」と「場面」とを強調しているのだから。しかし、問題は「何を」伝えようとするのか、その中身である。今、社会的実践行為として「伝え合い」が展開される必要があるといったが、そうであるためには、その基盤にしっかりとした伝達内容に対する知識、あるいは言語そのものについての知識が必要である。そうした基盤に立った言語主体の判断・認識が、不可欠である。 「何をこそ『伝え合い』の基盤にしなければならないか」『国語教育研究324』日本国語教育学会編、p35, 1999. 4
		小森茂	一方、まだまだ教科書に依存する状況もあり、言葉で伝え合う力を育成するためには、誰が誰に伝えるのか、なんのために伝えるのか、何を伝えるのか、どのように伝えるのかという観点で明確にしないと、道い回ってしまうことになると思います。 『座談会 新しい国語科の実践課題と言語の教育としての役割』『実践国語研究207』明治図書、p91, 2000. 5
		桑原陸	コミュニケーションにしても、伝え合う力にしても、その大切な中身は、相手・場・メッセージ(内容)である。さらに加えるとすれば、情報化社会において急速に進展してきている媒体である。伝え合う力という言葉は新しいものではない。 『司会者の立場からの提言』『国語教育研究331』日本国語教育学会編、p48, 1999. 11
		安居総子	今回の改訂では、言語行動の顕在化しているところだけでなく、顕在化の元となっている認識、思考、想像、伝達の「伝達」が重視された。即ち、コミュニケーションにおける相手や目的、場の意識を持つことにある。人と心を通じ合い協力し合っていくときの、互いに人(他者)を意識し、そこに心を向けて言葉を選ぶ人の育成を目指す。相手の言葉を受け入れる時だけでなく、返すときも相手を意識することを大切にしようというのである。 『「伝え合い」の学習・学習材・学習材化』『国語教育研究327』日本国語教育学会編、p4, 1999. 7
ポイントb / 伝え合う相手が明確であること	伝え合うことができる他者がいること	堀江祐爾	つまり、単なる「伝える力」ではなく、常に相手と場とがあり、そこにおいて「伝え合う」ことにより、互いを理解し合うための力なのである。 『四つの段階を何度も繰り返す』『実践国語研究205』明治図書、p13, 2000. 3
		余郷裕次	「伝え合う内容」と「伝え合う形式」、そして「伝え合う相手」が明確になった時、人はより豊かに表現し始めるのである。 『「伝え合う力」を高めるためのメディア・リテラシーの学習指導』『国語教育研究341』日本国語教育学会編、p37, 2000. 9
		本堂寛	そもそも、「伝え合う」という状況は、自分一人ではどうしようもないことであり、相手との共同作業であることに思ふ当たる。「伝え合う力」とは言語を媒介しながら共同作業を行う力なのである。 『「伝え合う力」と『書くこと』との関係』『実践国語研究211』明治図書、p6, 2000. 9
		本堂寛	教科目標に「伝え合う力」の育成が明示されたこと、各学年の目標や内容で相手・目的意識が重視されたこととの密接な関連は極めて重要である。つまり、これからの国語の学習において、「相手」「目的」「意図」「多様な場面や状況」などに応じた「適切に表現する能力」・「正確に理解する能力」を基にしながら、話し手と聞き手、書き手と読み手相互の立場や考え方を大切に「伝え合う力」を意図的に高めることが期待されているのである。 『まず『伝え合う力』の内容吟味と系統化を』『教育科学国語教育602』明治図書、p6, 2001. 2
		本堂寛	そこで、実際の学習場面における配慮として二つだけ述べておく。一つは、「～たくなる」場や状況を工夫することである。明確な「相手意識」「目的意識」をもちながら、話したくなる場、聞きたくなる状況、書きたくなる場などを意図的に設定することである。 『「伝え合う力」を育てるために』『教育科学国語教育583』明治図書、p10, 1999. 12
		小森茂	今後、積極的に学習指導計画案や「本時の学習指導案」には、「自分にとっての相手意識、目的意識」を位置付けていきたいものである。 『新しい国語科の目標と領域構成の在り方(二) — 『伝え合う力』 —』『教育科学国語教育575』明治図書、p123, 1999. 5
		小森茂	一方、まだまだ教科書に依存する状況もあり、言葉で伝え合う力を育成するためには、誰が誰に伝えるのか、なんのために伝えるのか、何を伝えるのか、どのように伝えるのかという観点で明確にしないと、道い回ってしまうことになると思います。 『座談会 新しい国語科の実践課題と言語の教育としての役割』『実践国語研究207』明治図書、p91, 2000. 5
		金子守	「伝え合う」学習は、とすると、形式的・技術的レベルに流されがちだが、一方で、コミュニケーションの内容を高め合うような指導の在り方を考えていくことも大切である。目的意識の明確化とともに、コミュニケーションの相手や場をどう設定するか、それを踏まえて、内容の深化・充実化をどのように図っていくかが、「伝え合う力」を高める学習の重要な鍵となるだろう。 『「伝え合う力」を高める作文学習』『教育科学国語教育595』明治図書、p21, 2000. 9
		山元悦子	「伝え合う力」というのは、相手の語を受け止めながら、自分の考えを紡ぎ出し、それを相手に伝えていく言語活動を営む能力と考えたい。 『系統的な対話指導を目指して』『教育科学国語教育594』明治図書、p17, 2000. 8
		係良こあなる関	原榮一

ポイントc / 互いの異質性が尊重されていること	大内 善一	今回の改訂で新たに加えられた「伝え合う力」という言葉は、戦後の学習指導要領の歴史においても初めて登場した用語である。その意図は、互いの立場や考え方を尊重し、言葉による伝え合いによって相互の理解を深め、豊かな人間関係を築いていこうとする能力と態度を養っていこうとするところにある。 「『伝え合う』場面の設定が重要な課題である」『教育科学国語教育674』明治図書、p45, 1999. 4
	藤井 治	「伝え合う力」という用語の意味も、互いの立場や考え方を尊重し、言葉による伝え合いによって相互の理解を深め、豊かな人間関係を築いていこうとする能力と態度を養っていこうとするところにあるからである。 「『伝え合う力』を高める双方向型作文学習の提案」『教育科学国語教育595』明治図書、p6, 2000. 9
	河野 庸介	「伝え合う力」とは、「表現力」と「理解力」の双方の言語能力を基盤とし、人と人との関係において互いの立場や考え方を尊重し合いながら、言葉によって互いの考えや意見などを伝え合う力のことである。この「伝え合う力」は、人と人との間の相互理解を深め、よりよい人間関係を築き、協力して新たな価値を創造していくことを可能にする能力でもある。 「[生きる力]と国語科(二)」『教育科学国語教育586』明治図書、p129, 2000. 2
	余郷 裕次	また、「伝え合う」という共同作業の中では、子ども一人ひとりの個性が尊重され、生かされなければならない。それぞれの子ども個性・差異を尊重するからこそ、それを共有しようとするプロセスやその結果としての価値の共有に意味があるのである。 「『伝え合う力』と『書くこと』との関係」『実践国語研究211』明治図書、p6, 2000. 9
	本堂 寛	教科目標に「伝え合う力」の育成が明示されたこと、各学年の目標や内容で相手・目的意識が重視されたこととの密接な関連は極めて重要である。つまり、これからの国語の学習において、「相手」「目的」「意図」「多様な場面や状況」などに応じた「適切に表現する能力」・「正確に理解する能力」を基にしながら、話し手と聞き手、書き手と読み手相互の立場や考え方を大切に「伝え合う力」を意図的に高めることが期待されているのである。 「まず『伝え合う力』の内容吟味と系統化を」『教育科学国語教育602』明治図書、p6, 2001. 2
ポイントd / 伝え合う場(状況・条件)が用意されていること	桑原 隆	コミュニケーションにしても、伝え合う力にしても、その大切な中身は、相手・場・メッセージ(内容)である。さらに加えることすれば、情報化社会において急速に進展してきている媒体である。伝え合う力という言葉は新しいものではないけれども、問題自体はとくに新しい課題というわけでもない。 「司会者の立場からの提言」『国語教育研究331』日本国語教育学会編、p48, 1999. 11
	安居 總子	今回の改訂では、言語行動の顕在化しているところだけでなく、顕在化の元となっている認識、思考、想像、伝達の「伝達」が重視された。即ち、コミュニケーションにおける相手や目的、場の意識を持つことにある。人と心を通じ合い協力し合っていくときの、互いに人(他者)を意識し、そこに心に向けて言葉を選ぶ行為の育成を目指す。相手の言葉を受け入れる時だけでなく、返すときも相手を意識することを大切にしようというのである。 「『伝え合い』の学習・学習材・学習材化」『国語教育研究327』日本国語教育学会編、p4, 1999. 7
	倉澤 栄吉	だから、対象意識、他者意識、この二つの意識をどうして自然にわき起こすような状況を作ってやれるかということがたいへん大事なことなので、「伝え合う力を高め合おう」なんて思わない方がいいので、人と人との交わり、人と事物との交わり、そういうことで「コミュニケーション」とか「伝え合い」とか「通じ合い」とかということが行われているのだ、ということに異議はありませんね。 「鼎談 国語教育を語る」『国語教育研究331』日本国語教育学会編、p58, 1999. 11
	小森 茂	自分にとっての相手意識・目的意識を生かしながら、目的や意図に応じた「伝え合う力を高める」ためには、「自分にとっての場面や状況、条件意識」を、子供の側から臨場感ももてるように準備したり、想定したりする必要がある。それは、子供にとっての「実の場」を具体化することであり、教室内の国語科、教科書受容型の国語科を点検・脱却することにもなる。 「新しい国語科の目標と領域構成の在り方(二) —『伝え合う力』—」『教育科学国語教育575』明治図書、p123, 1999. 5
	本堂 寛	教科目標に「伝え合う力」の育成が明示されたこと、各学年の目標や内容で相手・目的意識が重視されたこととの密接な関連は極めて重要である。つまり、これからの国語の学習において、「相手」「目的」「意図」「多様な場面や状況」などに応じた「適切に表現する能力」・「正確に理解する能力」を基にしながら、話し手と聞き手、書き手と読み手相互の立場や考え方を大切に「伝え合う力」を意図的に高めることが期待されているのである。 「まず『伝え合う力』の内容吟味と系統化を」『教育科学国語教育602』明治図書、p6, 2001. 2
		そこで、実際の学習場面における配慮として二つだけ述べておく。一つは、「～たくなる」場や状況を工夫することである。明確な「相手意識」「目的意識」をもちながら、話したくなる場、聞きたくなる状況、書きたくなる場などを意図的に設定することである。クラス全員が意欲をもって「伝え合い」の活動に参加できることが大切だからである。二つは、ねらいの明確な学習としながら「相手意識」「目的意識」を高めるために、相互評価を重視するべきである。相手の良い点を認め、それを自分の向上に役立てることが欠かせないからである。 「『伝え合う力』を育てるために」『教育科学国語教育583』明治図書、p10, 1999. 12
	大西 道雄	書くことの指導を通して、「言葉で伝え合う能力」を育成するためには、書くことの活動の場が、言葉で伝え合うことを必然とし、書き手が主体的に書く活動を発動させる刺激条件を備えていることが必要である。 「主体的伝え合い活動の授業組織化」『教育科学国語教育576』明治図書、p39, 1999. 6
	書くことによる伝え合いの力を高める指導は、伝え合い活動を要求する状況的な場を設定し、その活動条件を発見、充足する活動を組織して展開する。 「伝え合う活動を要求する状況的な場の条件の発見とその組織、展開を」『教育科学国語教育595』明治図書、p18, 2000. 9	
白石 寿文	ことばで「伝え合う」ことができない、「伝え合おう」とする心が育っていない、満腔から「伝え合え」と理解しあえたことに喜ばし幸福に浸ることがない・・・などという全面的否定状況にあるのだろうか。否である。ある側面から見たときに不十分であり、ある評価規準で判断しようとしたときに、不満と不安が拭き切れないのである。 その「ある」側面・評価とは、「パブリック」という条件である。 「『高める』ための工夫条件は『パブリック』にある」『教育科学国語教育602』、p11, 2001. 2	

ポイントd/伝え合う場(状況)が用意されていること	堀江祐爾	つまり、単なる「伝える力」ではなく、常に相手と場とがあり、そこにおいて「伝え合う」ことにより、互いを理解し合うための力なのである。 「四つ段階を何度も繰り返す」『実践国語研究205』明治図書、p13, 2000. 3
	金子守	「伝え合う」学習は、ともすると、形式的・技術的レベルに流れがちだが、一方で、コミュニケートする内容を高め合うような指導の在り方を考えていくことも大切である。目的意識の明確化とともに、コミュニケーションの相手や場をどう設定するか、それを踏まえて、内容の深化・充実化をどのように図っていくかが、「伝え合う力」を高める学習の重要な鍵となるだろう。 「『伝え合う力』を高める作文学習」『教育科学国語教育595』明治図書、p21, 2000. 9
	山元悦子	このような場を豊富に用意して、伝えたい内容を持たせ、それを伝え合う必要性のある場の中で、児童生徒同士が積極的に話し、聞き、聞いたことをまとめてまた伝えるといったやりとりとしての言語活動を意図的に、かつ日常的な状況として設けておくことがまず必要であろう。 「系統的な対話指導を目指して」『教育科学国語教育594』明治図書、p18, 2000. 8
ポイントe/伝え合う目的を理解していること	大西道雄	書き言葉で伝え合うという目的言語活動は、以下のように分節できる。1 目的(問題)意識を明確化する過程、2 メッセージを創出、組織し、構成する過程、3 応答を予測しながらメッセージを書き言葉で表現する過程、4 目的に応じてメッセージを受け手に送る活用過程、である。 「主体的伝え合い活動の授業組織化」『教育科学国語教育576』明治図書、p41, 1999. 6
	小森茂	今後、積極的に学習指導計画案や「本時の学習指導案」には、「自分にとっての相手意識、目的意識」を位置付けていきたいものである。 「新しい国語科の目標と領域構成の在り方(二) —『伝え合う力』—」『教育科学国語教育575』明治図書、p123, 1999. 5
	金子守	一方、まだまだ教科書に依存する状況もあり、言葉で伝え合う力を育成するためには、誰が誰に伝えるのか、なんのために伝えるのか、何を伝えるのか、どのように伝えるのかという観点で明確にしないと、道い回ってしまうことになると思います。 「座談会 新しい国語科の実践課題と言語の教育としての役割」『実践国語研究207』明治図書、p91, 2000. 5
	本堂寛	「伝え合う」学習は、ともすると、形式的・技術的レベルに流れがちだが、一方で、コミュニケートする内容を高め合うような指導の在り方を考えていくことも大切である。目的意識の明確化とともに、コミュニケーションの相手や場をどう設定するか、それを踏まえて、内容の深化・充実化をどのように図っていくかが、「伝え合う力」を高める学習の重要な鍵となるだろう。 「『伝え合う力』を高める作文学習」『教育科学国語教育595』明治図書、p21, 2000. 9
	安居総子	そこで、実際の学習場面における配慮として二つだけ述べておく。一つは、「〜たくなる」場や状況を工夫することである。明確な「相手意識」「目的意識」をもちながら、話したくなる場、聞きたくなる状況、書きたくなる場などを意図的に設定することである。 「『伝え合う力』を育てるために」『教育科学国語教育583』明治図書、p10, 1999. 12
	安居総子	今回の改訂では、言語行動の顕在化しているところだけでなく、顕在化の元となっている認識、思考、想像、伝達の「伝達」が重視された。即ち、コミュニケーションにおける相手や目的、場の意識を持つことにある。人と心を通じ合い協力し合っていくときの、互いに人(他者)を意識し、そこに心に向けて言葉を選ぶ人の育成を目指す。相手の言葉を受け入れる時だけでなく、返すときも相手を意識することを大切にしようというのである。 「『伝え合い』の学習・学習材・学習材化」『国語教育研究327』日本国語教育学会編、p4, 1999. 7
ポイントf/伝え合う手段方法をもっていること	小森茂	(2) 学習者が、なんのために(目標と必要)伝え合うのかわかっていること。それは、情報の送り手受け手はもちろんであるが、第三者である学習仲間もわかっており、そのために行動している。 「『伝え合う』をとらえ直し、『学び』を組織する」『教育科学国語教育576』明治図書、p17, 1999. 6
	桑原隆	一方、まだまだ教科書に依存する状況もあり、言葉で伝え合う力を育成するためには、誰が誰に伝えるのか、なんのために伝えるのか、何を伝えるのか、どのように伝えるのかという観点で明確にしないと、道い回ってしまうことになると思います。 「座談会 新しい国語科の実践課題と言語の教育としての役割」『実践国語研究207』明治図書、2000. 5, p91
	堀江祐爾	コミュニケーションにしても、伝え合う力にしても、その大切な中身は、相手・場・メッセージ(内容)である。さらに加えるとするれば、情報化社会において急速に進展してきている媒体である。伝え合う力という言葉は新しいものではあるけれども、問題自体はとくに新しい課題というわけではない。 「司会者の立場からの提言」『国語教育研究331』日本国語教育学会編、p48, 1999. 11
ポイントg/伝え合いが綿密な指導計画に基づいていること	堀江祐爾	(伝え合う内容)と(伝え合う形式)、そして(伝え合う相手)が明確になった時、人はより豊かに表現し始めるのである。 「『伝え合う力』を高めるためのメディア・リテラシーの学習指導」『国語教育研究341』日本国語教育学会編、p37, 2000. 9
	小森茂	具体的には、各学年に示された言語活動例を通して意図的・計画的に育成することが基本である。特に言語活動例を拠点にその相手や目的、内容や程度を確かめながら、1学期→2学期→3学期へと繰り返し学習し、言葉で「伝え合う力」を螺旋的に高められるような年間計画例を工夫する必要がある。 「『伝え合う力』を育てる国語科授業を構築する」『国語教育研究338』日本国語教育学会編、p36, 2000. 6
	楢原義頭	国語科の総目標に「伝え合う力」の育成が盛り込まれた背景には生徒の言語生活の変容があり、その実態とリンクした学習が組織されなければならないことを示している。 「論理を中心とする指導の工夫を！」『教育科学国語教育579』明治図書、p30, 1999. 9
	大西道雄	書き言葉で伝え合う能力の育成を図る授業は、新領域「書くこと」の時間だけでなく、「話すこと・聞くこと」や「読むこと」の授業においても、それらの言語活動を運動させて展開することが必要である。 「主体的伝え合い活動の授業組織化」『教育科学国語教育576』明治図書、p39, 1999. 6
	田中孝一	「伝え合う力」は、国語の基礎的な能力である表現力や理解力を基礎として発揮される能力である。したがって、「伝え合う力」は国語の幅広い学習全体の中ではなくくまれることになる。その意味で、各領域の学習が意図的にまた調和的に行われるよう、各学校においては、示された言語活動例を生かしさらに多様な工夫を進めるための検討が多角的に進められるよう期待したい。 「『伝え合う力』一言語活動例の工夫・活用から」『教育科学国語教育576』明治図書、p10, 1999. 6
	安居総子	(4) 伝え合う行為を通して、学習者個々に必要とされる、話す力、聴く力、話し合う力(技能と態度)がつけられるように学習活動が用意され、授業として組織されている。 「『伝え合う』をとらえ直し、『学び』を組織する」『教育科学国語教育576』明治図書、p17, 1999. 6
本堂寛	限られた国語の時間で最大限の効果を上げるためには、特に「伝え合い」の内容だけを取り上げた工夫がぜひとも必要になる。年間指導計画の中にその内容を系統的に位置づけながら、具体的な指導方法を考えることである。 「まず『伝え合う力』の内容吟味と系統化を」『教育科学国語教育602』明治図書、p6, 2001. 2	

ポイントh/表現と理解に関する基礎的な力が身につけていること	河野庸介	「伝え合う力」とは、「表現力」と「理解力」の双方の言語能力を基盤とし、人と人との関係において互いの立場や考えを尊重し合いながら、言葉によって互いの考えや意見などを伝え合う力のことである。この「伝え合う力」は、人と人との間の相互理解を深め、よりよい人間関係を築き、協力して新たな価値を創造していくことを可能にする能力でもある。「『生きる力』と国語科(二)」『教育科学国語教育586』明治図書,p129,2000.2
	安居總子	「伝え合う力」は、表現力と理解力を基盤とするがゆえに、それは、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」、「読むこと」の各領域にかかわる力である。「移行期間とこれからの国語科教育」『国語教育研究344』日本国語教育学会編,p32,2000.12 「伝え合う」という行為は、人が、他者から情報を得たり他者に情報を送ったりするとき、その情報を自己の内なる世界に取りこみ解釈し創造する行為で、適切に表現し的確に理解する力が基礎にないと通じ合わなくなってしまう。「伝え合う」を、「話す・聞く」に短絡することなく、もう少し深いところまでとらえてみる必要があるのではないかと。「『伝え合う』をとらえ直し、『学び』を組織する」『教育科学国語教育576』明治図書,p16,1999.6

伝え合いの【実際】にかかわるポイント [表2]

ポイントi/知識や考えを交流させ、相互に影響し合うこと	堀江祐爾	〈B(個と個とを結ぶ力)としての、「(言葉による)コミュニケーション(伝え合い)の力」も、国語科の重要な学習事項である。この力を身につけさせることにより、多くの個と個が結ばれ、(手)が象徴する経路を通して多様な情報が個の中に流れ込んでくる。「『伝え合う力』を高める学習を創る」『実践国語研究207』明治図書,p127,2000.5
	余郷裕次	また、「伝え合う」という共同作業の中では、子ども一人ひとりの個性が尊重され、生かされなければならない。それぞれの子どもの個性・差異を尊重するからこそ、それを共有しようとするプロセスやその結果としての価値の共有に意味があるのである。「『伝え合う力』と『書くこと』との関係」『実践国語研究211』明治図書,p6,2000.9 「言語を媒介として、何かが共有され、生み出されていく共同作業の過程として授業が成立していなければ、「伝え合う力」は高まらない。「『伝え合う力』と『書くこと』との関係」『実践国語研究211』明治図書,p6,2000.9
	山元隆春	子どもがテキストに対して示す多様な反応を交流させることを通して、読みと解釈の複数性を感じ取らせていくことが、読むことの学習において「伝え合う」力を育てていくことにつながる。「読みの複数性と読者の応答責任」『教育科学国語教育576』明治図書,p70,1999.6
	高木展郎	したがって、教室という場が有機的な関係性をもち、教室という場における構成要素としての学習者・指導者・学習材・学習環境が互いに意味を持って関わり合うという状況を生み出すことである。「『国語教育研究327』日本国語教育学会編,p4,1999.7
	大熊徹	そこで、これからの社会を生きる力としての国語の力は、一方的に表現したり理解したりする力ではなく、自分の捉えた疑問や課題等について互いに話し合ったり、必要なことを読み取り書きまめたりできる総合的で双方向的なコミュニケーション能力である。この「コミュニケーション能力」に相当する和語が「伝え合う力」というわけである。「『豊かに聴く力』こそ『伝え合う力』」『教育科学国語教育576』明治図書,p5,1999.6
ポイントj/言語活動が双方向性をもっていること	大西道雄	「伝え合う」ということは、一方的な伝達ではなく、受け手の応答がある相互交渉活動であることを意味する。「主体的伝え合い活動の授業組織化」『教育科学国語教育576』明治図書,p39,1999.6
	余郷裕次	そもそも、「伝え合う」という状況は、自分一人ではどうしようもないことであり、相手との共同作業であることに思い当たる。「『伝え合う力』と『書くこと』との関係」『実践国語研究211』明治図書,p6,2000.9
	大熊徹	そこで、これからの社会を生きる力としての国語の力は、一方的に表現したり理解したりする力ではなく、自分の捉えた疑問や課題等について互いに話し合ったり、必要なことを読み取り書きまめたりできる総合的で双方向的なコミュニケーション能力である。この「コミュニケーション能力」に相当する和語が「伝え合う力」というわけである。「『豊かに聴く力』こそ『伝え合う力』」『教育科学国語教育576』明治図書,p5,1999.6
	高木展郎	学習指導要領の「伝え合う力」という言葉が、コミュニケーションという言葉を使い換えたものであるとすると、これまでのコミュニケーションの訳として用いられてきた「伝達」という言葉は発信者からの単方向のものではなく、発信者と受信者との双方向の関係性の中に成立する対話的な関係性を、そこには認めることができる。「『書くこと』の指導観の転換」『教育科学国語教育576』明治図書,p43,1999.6 この「伝え合う力」には、コミュニケーションということが大きく関わってくる。ここでいうコミュニケーションとは、これまでいわれてきた単なる伝達ということではなく、言語行動する主体が双方向性をもつ言語活動を行うということである。「『話すこと・聞くこと』の学習材開発」『国語教育研究327』日本国語教育学会編,p29,1999.7
	中村敦雄	「伝え合う力」を育成するにあたって、盤の上の水練からの脱却を意識したい。課題を提示して書かせ、教師に提出させて終わり、で完結させないことである。書いた文章を実際に読み手に読んでもらい、コメントを返してもらうことで(交信)するといった発想が求められている。また、行動の範囲も教室にとどめず、教室外との関わりも含めてみつつ必要が指摘できる。「(わたし)たちを発信するためのメディアづくり」『教育科学国語教育602』明治図書,p10,2001.2
	大内審一	「伝え合う」は、文字通り双方向の言語行為を意味している。しかも、「伝え合う」という行為は相互に自分の考えや主張を理解してもらえるように努力していくといった、(意志)的な言語行為を表している。「『伝え合う力』を高める双方向型作文学習の提案」『教育科学国語教育595』明治図書,p6,2000.9
	山元悦子	このような場を豊富に用意して、伝えたい内容を持たせ、それを伝え合う必然性のある場の中で、児童生徒同士が積極的に話し、聞き、聞いたことをまとめてまた伝えるといったやりとりとしての言語活動を意図的に、かつ日常的な状況として設けておくことがまず必要である。「『系統的対話指導を目指して』」『教育科学国語教育594』明治図書,p18,2000.8 「伝え合う力」というのは、相手の話を受け止めながら、自分の考えを紡ぎ出し、それを相手に伝えていく言語活動を営む能力と考えたい。「『系統的対話指導を目指して』」『教育科学国語教育594』明治図書,p17,2000.8

ポイントk / 多様な言語活動が関連づけられていること	本堂 寛	新学習指導要領の全学年の「話すこと・聞くこと」の目標に「話し合い」の態度についての内容が示されており、言語活動例にも話し合い活動が取り上げられている。これを「伝え合う能力」の育成にかかわる内容に広げて読み取るならば、「書くこと」と「読むこと」との間における伝え合いの学習にも当然当てはめるべきだろうし、音声言語と文字言語の間での伝え合いも視野に入れなければならないだろう。 「『伝え合う言語活動』にとどまらない能力育成の学習を」『教育科学国語教育576』明治図書,p12, 1999. 6
	大西 道雄	書き言葉で伝え合うという目的言語活動は、以下のように分節できる。1 目的（問題）意識を明確化する過程、2 メッセージを創出、組織し、構成する過程、3 応答を予測しながらメッセージを書き言葉で表現する過程、4 目的に応じてメッセージを受け手に活用する過程、である。 「主体的伝え合い活動の授業組織化」『教育科学国語教育576』明治図書,p41, 1999. 6
	田中 孝一	「伝え合う力」は、国語の基礎的な能力である表現力や理解力を基礎として発揮される能力である。したがって、「伝え合う力」は国語の幅広い学習全体の中ではなくまれることになる。 「『伝え合う力』—言語活動例の工夫・活用から」『教育科学国語教育576』明治図書,p10, 1999. 6
	堀江 祐爾	「伝え合い」を「話しことば（音声言語）」だけに限定してはならない。「書きことば（文字言語）」もまた「伝え合い」の重要な方法（道具）である。 「四つの段階を何度も繰り返す」『実践国語研究205』明治図書,p14, 1999. 3
	相澤 秀夫	見方を変えれば、総合的な言語運用能力の育成と言ってもよい。「言葉で伝え合う能力」の育成は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」、さらには、その基盤、前提となる「読むこと」のすべての言語活動と深くかかわるのである。 「総合的な言語運用能力としての『伝え合う力』の育成を」『教育科学国語教育576』明治図書,p14, 1999. 6
	小森 茂	このように、「伝え合う力」とは話す・聞く能力、書く能力、読む能力を含む総合的な言語能力であり、一般的に音声言語中心に使用されるコミュニケーション能力より広い概念である。 「『伝え合う力』を育てる国語科授業を構築する」『国語教育研究338』日本国語教育学会編,p36, 2000. 6
	田中 孝一	したがって、「伝え合う力」は、話し言葉に限らず、書き言葉も含めた国語科全体の学習の中で育てていくべきものである。 「話し手と聞き手とでつくるスピーチ学習」『教育科学国語教育582』明治図書,p6, 1999. 11
	倉澤 栄吉	伝え合うということの中には、話しことばと文字ことばの両方が入っているわけです。西尾実先生の用語を用いれば、談話生活と文章生活という二つの相互に限定し合うものを矛盾しないようにするのが国語教育であるということになります。 「これからの国語教育実践」『国語教育研究330』日本国語教育学会編,p63, 1999. 10
	河野 庸介	「伝え合う力」は、表現力と理解力とを基盤とするがゆえに、それは、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」、「読むこと」の各領域にかかわる力である。 「移行期間とこれからの国語科教育」『国語教育研究344』日本国語教育学会編,p32, 2000. 12
ポイントl / ポイントで行われること	山元 悦子	このような場を豊富に用意して、伝えたい内容を持たせ、それを伝え合う必然性のある場の中で、児童生徒同士が積極的に話し、聞き、聞いたことをまとめてまた伝えるといったやりとりとしての言語活動を意図的に、かつ日常的な状況として設けておくことがまず必要であろう。 「系統的な対話指導を目指して」『教育科学国語教育594』明治図書,p18, 2000. 8
ポイントm / たえず自己の営みを振り返っていること	大西 道雄	教師による形成的評価は、学習者の目標達成活動の分節単位の達成度を見るものであるが、それはまた、学習者の目的遂行活動の円滑な進展状況を見るものである。そこで、分節ごとの学習者自身の形成的評価と有機的に関連づけることで、学習者の主体的活動を保障するとともに、学習活動の実質化を図ることができる。 「主体的伝え合い活動の授業組織化」『教育科学国語教育576』明治図書,p42, 1999. 6
	小森 茂	また、「伝え合う力」とは、自分と相手、相手と自分という「人間（じんかん）」の中で育成することが基本であり、従来の「何を・どのように」という内容や方法だけでなく、新たに子供たち（＝学習者）にとっての具体的な人間関係、言語使用や言語活動の目的や意図、場面や状況、表現や理解の方法、納得できる評価等を導入したり位置付けたりする創意工夫が必要である。 「『伝え合う力』を育てる国語科授業を構築する」『国語教育研究338』日本国語教育学会編,p36, 2000. 6
	本堂 寛	そこで、実際の学習場面における配慮として二つだけ述べておく。一つは、「～たくなる」場や状況を工夫することである。明確な「相手意識」「目的意識」をもちながら、話しくなる場、聞きたくなる状況、書きたくなる場などを意図的に設定することである。クラス全員が意欲をもって「伝え合い」の活動に参加できることが大切だからである。二つは、ねらいの明確な学習としながら「相手意識」「目的意識」を高めるために、相互評価を重視するべきである。相手の良い点を認め、それを自分の向上に役立てることが欠かせないからである。 「『伝え合う力』を育てるために」『教育科学国語教育583』明治図書,p10, 1999. 12

伝え合いの【成果】にかかわるポイント [表3]

ポイントn / 認識が抜け深められたり、新たな思考や価値が生み出されたりすること	白石 寿文	大村はま先生は「話し合える人を育てる」には「話し合いから生まれる自己開発を悟らせたい」（『大村はま国語教室2』筑摩書房 99頁 83年）と言われる。「伝え合う」の根底にこの姿勢が貫かれているよう心すべき指摘である。 「新『学習指導要領』（小学校）を眺む—「話す聞く」を中心に—」『国語教育研究324』日本国語教育学会編,p39, 1999. 4
	河野 庸介	「伝え合う力」とは、「表現力」と「理解力」の双方の言語能力を基盤とし、人と人との関係において互いの立場や考えを尊重し合いながら、言葉によって互いの考えや意見などを伝え合う力のことである。この「伝え合う力」は、人と人との間の相互理解を深め、よりよい人間関係を築き、協力して新たな価値を創造していくことを可能にする能力でもある。 「[生きる力]と国語科（二）」『教育科学国語教育586』明治図書,p129, 2000. 2
	余郷 裕次	また、「伝え合う」という共同作業の中では、子ども一人ひとりの個性が尊重され、生かされなければならない。それぞれの子どもも個性・差異を尊重するからこそ、それを共有しようとするプロセスやその結果としての価値の共有に意味があるのである。 「『伝え合う力』と『書くこと』との関係」『実践国語研究211』明治図書,p6, 2000. 9 言語を媒介として、何か共有され、生み出されていく共同作業の過程として授業が成立していなければ、「伝え合う力」は高まらない。 「『伝え合う力』と『書くこと』との関係」『実践国語研究211』明治図書,p6, 2000. 9

ポイントリノ認識が広げ深められたり、新たな思考や価値が生み出されたりすること	堀江祐爾	〈B個と個とを結ぶ力〉としての、「(言葉による) コミュニケーション(伝え合い)の力」も、国語科の重要な学習事項である。この力を身につけさせることにより、多くの個と個が結ばれ、(手)が象徴する経路を通して多様な情報が個の中に流れ込んでくる。 「『伝え合う力』を高める学習を創る」『実践国語研究207』明治図書, p127, 2000. 5
	山元隆春	子どもがテキストに対して示す多様な反応を交流させることを通じて、読みと解釈の複数性を感じ取らせていくことが、読むことの学習において「伝え合う」力を育てていくことにつながる。 「読みの複数性と読者の応答責任」『教育科学国語教育576』明治図書, p70, 1999. 6
	小田迪夫	所有する思想、意見、情報などをお互いに伝え合って、共有物にするというだけでなく、相手が伝えるものを自分が伝えるものつきあわせ、新しい思考内容を創りだしていく。そのような対話活動が営まれる指導をめざすのである。それは「思考創造の活動」である。 「思考を創り出す対話能力の育成」『教育科学国語教育576』明治図書, p8, 1999. 6
	安居総子	(3) 相互に伝え合うことによって、新たな状況が生まれ、新しいもの(こと)が創り出されたりして、学習者が充実感成就感でみだされ、教室が生き生きとしている。 「『伝え合う』をとらえ直し、『学び』を組織する」『教育科学国語教育576』明治図書, p17, 1999. 6
	甲斐睦朗	日本が国際化の道をたどっている、あるいは情報化の道を進んでいる。また、人口も都市に集中する。そのことからいうと、「伝え合う」、あるいは「相互伝達」は、自分の思いや考えを人に伝え、相手の言うことを聞き、考えをより合わせることによって、何かをつくり出していく。あるいは自分を磨いていく。そういう能力を育てていこうというのが、新しい指導要領の根本だと思っているわけです。 「座談会 新しい国語科の実践課題と言語の教育としての役割」『実践国語研究207』明治図書, p87, 2000. 5
	河野庸介	「伝え合う力」とは、「表現力」と「理解力」の双方の言語能力を基盤とし、人と人との関係において互いの立場や考えを尊重し合いながら、言葉によって互いの考えや意見などを伝え合う力のことである。この「伝え合う力」は、人と人との間の相互理解を深め、よりよい人間関係を築き、協力して新たな価値を創造していくことを可能にする能力でもある。 「『生きる力』と国語科(二)」『教育科学国語教育586』明治図書, p129, 2000. 2
	大西道雄	この学習を通して、伝え合う活動の技術と方法の習得を促進するだけでなく、確かな状況認識に基づいて伝え合うべき内容を創り出す力の育成を図る。 「伝え合う活動を要求する状況的場の条件の発見とその組織、展開を」『教育科学国語教育595』明治図書, p18, 2000. 9
金子守	「伝え合う」学習は、とすると、形式的・技術的レベルに流されがちだが、一方で、コミュニケートする内容を高め合うような指導の在り方を考えていくことも大切である。目的意識の明確化とともに、コミュニケーションの相手や場をどう設定するか、それを踏まえて、内容の深化・充実化をどのように図っていくかが、「伝え合う力」を高める学習の重要な鍵となるだろう。 「『伝え合う力』を高める作文学習」『教育科学国語教育595』明治図書, p21, 2000. 9	
ポイントのより良い人間関係が築かれること	大内善一	今回の改訂で新たに加えられた「伝え合う力」という言葉は、戦後の学習指導要領の歴史においても初めて登場した用語である。その意図は、互いの立場や考え方を尊重し、言葉による伝え合いによって相互の理解を深め、豊かな人間関係を築いていこうとする能力と態度を養っていこうとするところにある。 「『伝え合う』場面の設定が重要な課題である」『教育科学国語教育574』明治図書, p45, 1999. 4 「伝え合う力」という用語の意味も、互いの立場や考え方を尊重し、言葉による伝え合いによって相互の理解を深め、豊かな人間関係を養っていこうとする能力と態度を養っていこうとするところにあるからである。 「『伝え合う力』を高める双方向型作文学習の提案」『教育科学国語教育595』明治図書, p6, 2000. 9
	安居総子	「伝え合う」は、文字通り双方向の言語行為を意味している。しかも、「伝え合う」という行為は相互に自分の考えや主張を理解してもらえようように努力していくといった、(意志)的な言語行為を表している。 「『伝え合う力』を高める双方向型作文学習の提案」『教育科学国語教育595』明治図書, p6, 2000. 9 今回の改訂では、言語行動の顕在化しているところだけでなく、顕在化の元となっている認識、思考、想像、伝達の「伝達」が重視された。即ち、コミュニケーションにおける相手や目的、場の意識を持つことにある。人と心を通じ合い協力し合っていくときの、互いに人(他者)を意識し、そこに心に向けて言葉を選ぶ人の育成を目指す。相手の言葉を受け入れる時だけでなく、返すときも相手を意識することを大切にしようというのである。 「『伝え合い』の学習・学習材・学習材化」『国語教育研究327』日本国語教育学会編, p4, 1999. 7 (5) 伝え合うことで、人間関係ができ、互いに尊重して、理解しあい、協力しあうなかで、自らを律しつつ他を思いやる精神が育つ、そういう場になっている。 「『伝え合う』をとらえ直し、『学び』を組織する」『教育科学国語教育576』明治図書, p17, 1999. 6
	堀江祐爾	つまり、単なる「伝える力」ではなく、常に相手と場があり、そこにおいて「伝え合う」ことにより、互いを理解し合うための力なのである。 「四つの段階を何度も繰り返す」『実践国語研究205』明治図書, p13, 2000. 3
	河野庸介	「伝え合う力」とは、「表現力」と「理解力」の双方の言語能力を基盤とし、人と人との関係において互いの立場や考えを尊重し合いながら、言葉によって互いの考えや意見などを伝え合う力のことである。この「伝え合う力」は、人と人との間の相互理解を深め、よりよい人間関係を築き、協力して新たな価値を創造していくことを可能にする能力でもある。 「『生きる力』と国語科(二)」『教育科学国語教育586』明治図書, p129, 2000. 2
	田中孝一	「互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う」ということは、一つには、人間の尊重、良好な人間関係の構築という学校教育全体の基本的な立場を表明したものであるし、今一つは、その立場を「言葉で」と規定することによって、言語の教育としての立場に立つ国語科独自の立場を強調したものである。 「話し手と聞き手とでつくるスピーチ学習」『教育科学国語教育582』明治図書, p5, 1999. 11
	相澤秀夫	見方を変えれば、総合的な言語運用能力の育成と言ってもよい。「言葉で伝え合う能力」の育成は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」、さらには、その基盤、前提となる「読むこと」のすべての言語活動と深くかかわるのである。 「総合的な言語運用能力としての『伝え合う力』の育成を」『教育科学国語教育576』明治図書, p14, 1999. 6
	安居総子	(4) 伝え合う行為を通して、学習者個々に必要とされる、話す力、聴く力、話し合う力(技能と態度)がつけられるように学習活動が用意され、授業として組織されている。 「『伝え合う』をとらえ直し、『学び』を組織する」『教育科学国語教育576』明治図書, p17, 1999. 6

4 分類整理結果の考察

(1)【前提】に関わるポイント群の特徴

このポイント群には、実際の伝え合い実践を行う際にあらかじめ確立しておかなければならない事柄が集約されており、全項目の半数にあたる8項目が該当している。これは、実際に音声や文字をやりとりする伝え合い活動に入る前にクリアしておかなければならない問題が、意識や状況設定等の多岐にわたって存在していることを物語っている。

前提に関わるこれら8項目は、伝え合い活動を引き出し、成果を得るために重要な役割を担っている。例えば、異質性の尊重は、伝え合い活動の実質的な部分に直接的に関与し活動の「当面の」成否を左右する要素ではないかもしれないが、他者を尊重する土壌を学習者の内面に築いておくことは、酌み合う、学び合う姿勢を生み、認識や思考の拡がりとともに、より良い人間関係を築くことを可能にする。指導によっては各ポイントの扱いに軽重が生じることは当然予想されるが、認識の甘さや身勝手な理由によって特定のポイントを常に軽視したり、削除し続けたりすることは危険であり、実践の際には注意が必要である。

(2)【実際】に関わるポイント群の特徴

このポイント群には、伝え合い活動の実践段階において、学習者や場がどのような状態にあるべきか、ということに関する内容がまとめられている。

前提として確立した諸要素を踏まえて実際に言葉をやりとりする際には「影響し合っている」「双方向性をもっている」という状況を作り上げていくことが求められる。また、学習活動のすべてを教師任せにするのではなく、学習者自身が自他の営みを形成的に見取っていくことも必要である。

【実際】に関わるポイントを満たすことによって実際の伝え合い活動は活性化し、次の段階において導き出される学習成果がより充実し

たものとなる。

(3)【成果】に関わるポイント群の特徴

このポイント群には、伝え合い活動によって「学習者がどのような状態にまで高まっているべきであるのか」ということが示されている。

伝え合いによって、新たな思考やより良い人間関係が築かれ、生活に生きて働く言語の力が育っていく。そうした状態にまで学習者一人ひとりが高まっていくことが、伝え合いの【成果】として求められているのである。

5 研究のまとめ ー成果と課題ー

本稿においては、のべ112の言説を分類整理し、16項目の「伝え合う力を高める授業に求められる要素要件(実践上のポイント)」を導き出した。これら16項目は、単元の特性に応じて取り上げ方に当然軽重がでてこようが、伝え合う力を高める実践の場においては基本的に全てに留意していくことが求められる。

次に、16項目を、〈伝え合いの【前提】に関わるポイント群〉〈伝え合いの【実際】に関わるポイント群〉〈伝え合いの【成果】に関わるポイント群〉という三つのカテゴリーに分類した。

こうした基礎作業によって、全項目の半数にあたる8項目が〈伝え合いの【前提】に関わるポイント群〉に該当したものであるということが明らかになった。この結果は「実践にあたっては、伝え合いに踏み込む前の段階において留意すべき内容や準備が数多く存在することを認識した上で、それら一つ一つを丁寧にクリアしていく必要がある」という貴重な指摘として受け止めなければならないであろう。

しかしながら、本稿において行った分類整理が恣意的であるということは否定できない。分類整理の切り口が妥当かどうかという検証や、分類基準となる各言説の共通点をどのレベルに設定するかという点において厳密性を欠いている。また、各ポイントの重要性や価値についての言及ができなかったことも挙げられる。今後

の課題としたい。

注

- 1) 紙幅の都合上、表中にあげた言説は引用箇所が限られている。ご容認いただきたい。
- 2) 表中に著者名、論文名等を記載した。また、特定する必要上、「出版社名」「発行月」についてもあわせて記載した。
- 3) 便宜上、本稿においては小・中学校及び高等学校に所属する教員を実践者、大学その他研究機関に所属する者（所属していた者）を研究者として位置づける。そのため、『国語教育研究』『教育科学国語教育』『実践国語研究』の各誌に掲載されてい

る論文であっても、それが実践者の手になる場合は、今回は分類・整理の対象とせず、資料として扱わない。

- 4) 表現こそ異なるが、内容的には「伝え合い」について記述されている言説も多い。しかし、今回の分類整理においては、「伝え合い」「伝え合う力」と文章中、もしくは論文タイトルに明確な表記のあるものだけを取り上げ、その他は対象外とした。

引用文献

樋口康彦「大学生における準ひきこもり行動に関する考察ーキャンパスの孤立者についてー」富山国際大学国際教養学部紀要 VOL.2, 2006